

他者とのかかわりによって促される 1 歳児の 「しゃべる」「うたう」について

How one-year-old children become capable of singing songs and speaking due to encouragement from others

諸 富 満希子

Makiko MOROTOMI

Abstract

This is a report of continuous observations on how children become capable of singing songs due to encouragement from others (usually the mother). In infants, many aspects of “speaking” and “singing” are difficult to distinguish, so I also recorded all acts of “speaking,” limiting the definition of the act of “singing” to the narrow sense of “singing an established song.” The targeted infants were fraternal twin girls, and observations regarding their “speaking” and “singing” were made in the 10- to 23-month period after birth during home visits that occurred approximately every other month. It was observed that even though the girls received encouragement from the same mother, one infant acquired language earlier and showed an interest in “speaking,” while the other showed greater interest in “singing” than “speaking” and acquired “singing” earlier. The targeted infants showed a strong interest in onomatopoeia in the case of both “speaking” and “singing.” Both became capable of almost completely singing one song 23 months after birth. Their mother sang various new songs to them, but the targeted infants each had a favorite song that they tended to prefer to continuously sing. It was observed that encouragement from the mother was the most significant factor in eliciting “speaking” and “singing” from the infants.

Keywords : a strong interest in onomatopoeia, a favorite song, encouragement from the mother

I はじめに

最近電車の中で、乳児がなにか話しかけたように母親の方を見ているにもかかわらず母親はスマホの画面に夢中で、乳児が「ア」というような声を発したときにだけチラッと見るという光景に遭遇することが多くなった。筆者は子どもが歌をうたうようになっていく過程に興味があり、このような場面で母親がどうして手あそびなどで子どもとかわりを持つとしないのか、常々残念に思っている。

ことばを習得していく過程について、戸田は「言語獲得の急増は、18ヵ月から24ヵ月までが顕著である」¹⁾と述べるとともに、「乳児がことばを獲得するにはどのようなことが必要とされるのか。(中略)一つは母親のコミュニケーションが考えられるのではなからうか」²⁾と述べている。また石川が「言葉であらわすこと

と歌うことは相互に往復する、簡単には分かれ難い一連なりの営みであると感じられる。」³⁾と述べているように、「しゃべる」と「うたう」は特に乳児においては区別がつきにくい部分も多いが、どちらにおいても他者からの働きかけが重要な役割を果たしていることは確かであろう。志村は「実際の育児や保育の現場では、母親や養育者は乳児の音声表出行動は乳児との相互作用が保持された状態でより活性化すること、相互作用が密接になったときに多く現れることに直観的に気づいていることが多い」⁴⁾と述べている。

筆者は子どもがどのように歌をうたえるようになっていくのか、その過程に関心を持っており、今回の記録は、子どもが他者(おもに母親)からの働きかけによってどのように歌をうたうようになっていくのかを継続的に観察しているものの報告である。しかしながら先の石川も述べているように「しゃべる」と「うたう」は特に乳児においては区別がつきにくい部分も多いため、今回は「しゃべる」という行為も同時に記録

し、かつ「うたう」という行為は「既成の歌をうたう」という狭義に限定し観察をおこなった。

観察対象とした被験児たちは二卵性の双子の女児であり、観察を始めたときは生後10ヵ月であった。双子を観察対象に選んだ理由は、生育環境が同じである被験児たちであっても、その「しゃべる」「うたう」には違いがみられるかどうかを見たかったからである。筆者は「被験児たちの姉が通っている幼稚園に来ている先生」であり、「一緒に遊ぶために来ている」というイメージで家庭に入った。したがって、筆者自身がことばがけをしたり、歌をうたったり、おもちゃを使った遊びに参加することもある。なお、被験児の母親は幼稚園でコーラスに参加しているが、音楽家ではない。

II 観察の方法

対象となる被験児：2015年3月18日生まれのA・B（二卵性双子・女児）

なお被験児の保護者に対しては、本研究の目的・手順・プライバシーの保護などの情報を口頭および書面で呈示し、承諾を得ている。

観察期間：2016年1月21日から2017年3月14日までの15回、おおよそ1ヵ月に1～2回のペースで午前中の約1時間（第5回目・12回のみ午後）自宅を訪問して共に過ごしているが、被験児および被験児の姉の体調により間隔があいてしまったときもあった。

場所：被験児の自宅

記録方法：被験児の様子は手持ちのビデオカメラで撮影し、音声についてはより感度の良い録音機を使用した。

III 観察の記録

第1回目 2016年1月21日（被験児10ヵ月）

初めての人が来たということで、ふたりとも緊張気味である。カメラや録音機に興味を示す。母親のことばがけにより、それに応える形で動作または声を出す。被験児Bは「今日楽しかった人」という母親の問いかけに対し「アー」と反応した。

第2回目 2016年2月5日（被験児10ヵ月）

寝起きのため、ちょっとしたことで泣く。そのあとおやつタイムになり、ポーロを食べ始める。ポーロが転がってしまうとそちらを見て、被験児Aが「ア」と言う。母親からの誘導により取りに行く。またポーロ

の入っている袋を振り、母親がそれを見て「まだあるね」と語りかけると、喜んでまた振る。ポーロの袋を被験児A・Bで取り合いになったとき、母親が「Aちゃん、Bちゃんにも貸してあげて」と言い、被験児Aが譲った。そのことを母親に褒められ、嬉しそうな表情を見せた。

第3回目 2016年2月26日（被験児11ヵ月）

人見知り期で、筆者の顔を見るなり泣いていた。絵本の『かんかんかん』（のむらさやか 2010 福音館書店）が大好きで、その本を見ながら被験児Aが「かん」と言った。母親は食べ物ページでは「○○おいしいね、パクッ」と被験児たちに食べさせる真似をしている。筆者が《手をたたきましょう》（小林純一作詞 チェコ民謡）の歌をうたうと、被験児たちは身体でリズムを取った。「あっはっは」の部分になると、母親の動作を真似るようにおなかのあたりを触っていた。母親の話では「パパ」とか「ママ」はしゃべることができているようだ。

第4回目 2016年3月14日（被験児11ヵ月）

被験児が指をなめているとき「ペロペロペロ」、口から指を出したとき「チュパ」と筆者が音で表現すると、とても喜んでいる。いつ「チュパ」と筆者が言うかを期待して、「チュ」と被験児Aが一回ことばを発した。また前回に引き続き絵本の『かんかんかん』を持ってきて、被験児Aは「かん」と言う。母親が「スパゲッティ、チュルチュルチュルー」と言うとき食べた真似をする。母親は「おいしいね」と応えている。被験児Aは「これやー」「これ」などとしゃべっている。被験児Bは名前を呼ばれると手を挙げる。おやつをもらって母親が「どうも、どうも」と言うとき、頭を下げる。《ころころたまご》¹⁾の手あそびを筆者がしてみせると「ころころ」の部分で手を回すような動作をし、「おりこうさん」のところで頭をなでていた。

第5回目 2016年3月23日（被験児12ヵ月）

今日は春休みで被験児たちの姉が在宅。はじめ被験児ふたりは午睡中だった。被験児Bが先に起きた。音楽に合わせて身体を揺する。「ウーア」「ギーギギ」などとしゃべる。絵本『びよーん』（まつおかたつひで 2000 ポプラ社）に合わせて、身体を母親に高く持ち上げられる遊びをするが、母親がわざと持ち上げないと「あれ？」という顔をする。《ころころたまご》の手あそびをすると、一緒にころころと手を動かしていた。また姉が電子ピアノを弾き出すと、被験児Bもおもちゃのピアノをたたき「アーワー」と言う。今回は被

験児 A が昼寝から起きるのが遅かったため、被験児 B の観察に終了した。

第 6 回目 2016年 4月 7日 (被験児12ヵ月)

今日も春休みで被験児たちの姉が在宅。今日はいろいろな歌に反応した。《手をたたきましょう》で被験児 A が「あっは」と声を出した。また《ころころたまご》の手あそびの際も、被験児 A は「ころ」と言っている。

一方被験児 B は《とんとんとんひげじいさん》⁽²⁾の手あそびをしている姉をじっと見ていた。また姉がうたう《おかえりのうた》(天野蝶作詞 一宮道子作曲) のリズムに合わせる感じで、手を動かしたり足踏みをしていた。

第 7 回目 2016年 4月 26日 (被験児13ヵ月)

被験児 A が非常に多くのことばをしゃべるようになった。以下にそれを記す。

クッキーをもらうとき「ハイ」、おむつを替えたあと「アッカ」「ハイ」など、床のよだれを見て「これ」、おむつを捨てるとき「ヤー」、その他「ないない」「ありがと」「ママ」。一方被験児 B は母親の「どすこい、どすこい」という声に合わせて四股を踏んでいる。

歌に関しては、《手をたたきましょう》の歌を、被験児 A は「あっはっは」の部分から動作付きでうたうことができた。被験児 B は足踏みをすることができた。《アイアイ》(相田裕美作詞 宇野誠一郎作曲) の歌のときも、被験児 A は「アイアイ」と言う。筆者が帰る時に「バイバイ」とはっきり言うことができていた。

第 8 回目 2016年 5月 31日 (被験児14ヵ月)

被験児 A は朝寝中。被験児 B が外へ行きたいように「バイバイ」「ばあ」と繰り返し言う。空のペットボトルをもらったら、ペコペコと音が鳴るので喜んでいいる。水をコップに入れる真似をしきりにするので、筆者が「チャチャ」と水を入れる音を擬音化してあげるととても喜ぶ。また母親も、被験児 B がコップに水を入れる真似をしているとき「じょうず、じょうず」「こぼれちゃう、こぼれちゃう」などと反応を示している。その後被験児 A が起き、ふたりでおもちゃを片付ける。ひとつずつ片付け終わると手をパチパチする。《手をたたきましょう》の歌はブームが去っていた。

第 9 回目 2016年 8月 9日 (被験児16ヵ月)

6月・7月と被験児たちが突発性湿疹になったり、家族が病気になったりしたため、研究を中断した。今回は夏休みのため、姉が在宅。姉に対し、被験児 B が

「ねえね」と呼ぶ。

《キラキラ星》(武麿悦子作詞 フランス民謡)をうたうと、被験児 B は歌に合わせて「アー」と所々うたう。また歌に合わせて手をきらきらしたり、身体を動かしている。今度は《かえるの合唱》(岡本敏明作詞 ドイツ民謡)をうたうと、被験児 A は「クワックワッ」と言うが、被験児 B は《かえるの合唱》の途中でも「キライラ」と《キラキラ星》をうたっていた。「キラ」とうたうほか、「ほしよ」の語尾の「アー」や「ひかる」の語尾の「ルー」をうたっている。

姉が《南の島のハメハメハ大王》(伊藤アキラ作詞 森田公一作曲)をうたうと、被験児 A は「ハメハメハ」の「ハー」の動作にはまり「ハー」とも言う。「もう 1 回」「ママ、もう 1 回」ともしゃべっていた。一方被験児 B はそのときも「キラー」と《キラキラ星》をうたっていた。

第10回目 2016年 9月 13日 (被験児17ヵ月)

被験児たちは段ボールを積み重ねている狭い隙間に、アンパンマンのカードを入れるあそびにはまっている。被験児 A がカードを隙間に入れたときに筆者が「いない、いない」と言う、「ばあ」と応える。被験児 A は自分がして欲しいことがあるとき「ン」と言う代わりに、はっきりと「ママ」と言うようになった。被験児たちは家の中を走るのが好きで、母親に「位置に着いて、よういドン」と言って欲しいため「ママ」「よーい」と促す。また急に楽しくなると、被験児 B は「ガーガー」と言いながら踊り出す。被験児 A は本を見ながら「うーちゃん」「ばんまん」と言う。またシールを貼りながら「ペタッ」ともしゃべっていた。被験児 A・B とも、くるくる回るのが好きである。母親はその様子を見て「くーるくるっ」とリズムをつけて応えている。

被験児 B は《キラキラ星》の歌が好きなようで、今回は「まばたき」「キラキラひかる」「おそら……よ」の部分でうたうことができた。また被験児 A・B とも《南の島のハメハメハ大王》では動作をしながら「ハメハメハ」とうたうが、被験児 A は今日は 1 オクターブぐらい高い声を出していた。

第11回目 2016年 10月 4日 (被験児18ヵ月)

被験児 A はかなりいろいろなことばをしゃべることができる。「ばんまん」「おかあさん」「ゲット」「どうぞ」などのことばの他、電子ピアノの電源を自分で切って音が鳴らなくなると「こわれた」と言う。一方被験児 B は、「ママ」「ない」と言う。

《とんとんとんひげじいさん》のアンパンマンバージョン^⑥の手あそびを被験児たちは上手にやることができる。小さい声で「トントン」「マン」「ワン」とうたっている。

第12回目 2016年11月1日（被験児19ヵ月）

被験児Bがいろいろなことばをしゃべるようになってきた。自分の方に注目して欲しいときに、筆者に向かって「せんせい」と呼びかけてくる。その他「からっぽ」「アンパンマン」「ふた」などのことばを確認できた。筆者と手をつなぐために「おてて」と促してくることもあった。またピコ太郎のPPAP^④を母親がうたうと「ペン」と言う。

被験児Aは絵本『いないいないばあ』（松谷みよ子1967 童心社）の本を持ってきて、筆者の「ばあ」という声色に喜んでいる。前々回に引き続き被験児たちは走るのが大好きで、「よういドン」と言ってもらいたくて、「よーい」と母親を促している。母親の話では、筆者が帰ったあと、被験児Aは「せんせい、いなーい」と言っていたそうである。

第13回目2016年11月29日（被験児20ヵ月）

筆者が行くとすぐにおもちゃのお金をばらまいて、その上に滑り込んだ。筆者がその動作を「ズルーッ」と音で表すと喜んでた。被験児Aは「おかね」「どうぞ」などのことばの他、ジャンパーの掛かっているのを見て、「ねえね」「ゆりちゃんの」「ママの」「ジャンパー」「こっち」と説明してくれた。被験児Bは積み木あそびのとき「ちょうだい」と言うことができる。また足踏みをしていたので、筆者が《手をたたきましよう》の歌をくちずさむと、足踏みを披露してくれた。ふたりで一緒に舟をこぐ真似をしていたが、被験児Aは「ギッコン、バッコン」とはっきり言うことができ、被験児Bは「ギッコン……」とだけ言っていた。

《一匹の野ねずみ》^⑤の手あそびを初めてやってみたら、被験児Aは興味を示し「おおさわぎ」の「ぎ」と「チュ」の部分のすぐ真似していた。さらに被験児Aは、母親とアンパンマンのパズルで遊びながら

「アンパンマン、こっち?」「ここないね」「くるりんぱっ（パズルのピースを回転させること）」などと会話していた。

また被験児たちは相変わらずくるくる回るのが大好きで、母親は第10回目の観察時と同じように「くるっくるっ」とリズムをつけて応えていた。

第14回目2017年2月8日（被験児22ヵ月）

被験児たちの病気により、約2ヵ月ぶりの観察となった。電話のおもちゃを持ってきて、被験児Aは「もう1回」「〇〇ってやって」、被験児Bは「もしもし」「火事です」「来て」としゃべっている。母親を馬に見立ててその上に乗るのが大好きで、被験児Aは出発の際「行ってきます」の意味で「行ってらっしゃい」と言っている。被験児A・Bとも断片的に《キラキラ星》をうたう。被験児Bは歌のときは柔らかい声を出すが、被験児Aは母親が《ドレミの歌》（O. ハマースタイン作詞 R. ロジャース作曲 ペギー葉山訳詞）をうたうとわざと怒鳴りながら「ド」「レ」「ファ」「さあ……しょう」などとうたっていた。

第15回目2017年3月14日（被験児23ヵ月）

筆者が観察を始めたときには、被験児たちと母親はおもちゃのビニールハウスの中にかくれるあそびをしていた。その際被験児Aは「ここいるよ」「もう1回やって」「お茶ちょうだい」など、筆者にもはっきりとわかるような明瞭な話し方で母親と会話していた。

今回、被験児Bは《キラキラ星》をひとりで最後までうたうことができた。そのときに柔らかい声を用い、また筆者の歌いだしの音程に合わせた音でうたい出していた。また被験児Aは《とんとんとんひげじいさん》のアンパンマンバージョンを手あそびしながら小さい声でうたっていたが、これもほとんどの部分をうたうことができていた。そのあと母親が《くつが鳴る》（清水かつら作詞 弘田龍太郎作曲）をうたわせようとすると怒鳴りながら声を出していた。

最後に、観察時に被験児A・Bがおこなったそれぞれの「しゃべる」「うたう」を表にまとめた（表1参照）。

表1 被験児たちが「しゃべる」「うたう」したもの

観察時 (月齢)	しゃべる		うたう	
	被験児 A	被験児 B	被験児 A	被験児 B
1 (10)		「アー」		
2 (10)	「ア」			
3 (11)	「かん」		身体でリズムをとる	身体でリズムをとる

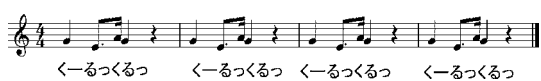
4 (11)	「チュ」「かん」 「これやー」「これ」			ころころの動作をする
5 (12)		「ウーア」「ギーギギ」 「アーワー」		身体を揺する ころころと手を動かす
6 (12)			「あっは」 〈手をたたきましょう〉 「ころ」 〈ころころたまご〉	手を動かし足踏みをする
7 (13)	「ハイ」「アッカ」「これ」 「ヤー」「ないない」「あり がと」「ママ」「バイバイ」		「あっはっは」 〈手をたたきましょう〉 「アイアイ」 〈アイアイ〉	
8 (14)		「バイバイ」「ばあ」		
9 (16)	「もう 1 回」 「ママ、もう 1 回」	「ねえね」	「クワックワッ」 〈かえるの合唱〉 「ハー」 〈南の島のハメハメハ大 王〉	「アー」「キラキラ」「ルー」 〈キラキラ星〉
10 (17)	「ばあ」「ママ」「よーい」 「うーちゃん」「ぼんまん」 「ペタッ」	「よーい」「ガーガー」	「ハメハメハ」 〈南の島のハメハメハ大 王〉	「まばたき」「キラキラひ かる」「おそら…よ」 〈キラキラ星〉
11 (18)	「ぼんまん」「おかあさん」 「ゲット」「どうぞ」「こわ れた」	「ママ」「ない」	「トントン」「マン」「ワン」 〈とんとんとんとんアン パンマン〉	「ワン」 〈とんとんとんとんアン パンマン〉
12 (19)	「よーい」 「せんせい、いなーい」(母 親の確認)	「せんせい」「からっぽ」 「ぶた」「アンパンマン」 「おてて」「ペン」		
13 (20)	「おかね」「どうぞ」「ねえ ね」「ゆりちゃんの」「マ マの」「ジャンパー」「こっ ち」「ギッコン、パッコン」 「アンパンマン、こっ ち?」「ここないね」「く るりんぱっ」	「ちょうだい」 「ギッコン」	「ぎ」「チュ」 〈一匹の野ねずみ〉	
14 (22)	「もう 1 回」「〇〇って やって」「行ってらっしゃ い」「カパカパ」	「もしもし」「火事です」 「来て」「ワンワン」	「キラキラひかる」 〈キラキラ星〉 「ド」「レ」「ファ」「うた を」〈ドレミのうた〉	「キラキラひかる」 〈キラキラ星〉
15 (23)	「ここいるよ」「もう 1 回 やって」「ママもう 1 回し たい」「お茶ちょうだい」	「はい」「1 さい」 「だいじょうぶ」	「とんとんとんとんアン パンマン とんとんと ん食パンマン とんと んとんとんカレーパンマ ン とんとんとんパン イキンマン とんとん とんとん (不明瞭) きらっ きらっきらっきらっぼく チーズ ワン〈とんとん とんとんアンパンマン〉	「ひかるおそらのほしよ まばたきしては みんな を (不明瞭) キラキラひ かる おそらのほしよ」 〈キラキラ星〉

IV 考 察

はじめに述べたように、この記録は他者（おもに母親）からの働きかけによって促される子どもの声を使った反応を観察した報告である。双子ということで、そのふたりの相違を観察できるという大きな長所がある一方、ふたりの声が混然一体となってしまった部分があったこと、そしてふたりであるため病気などにより期間があいてしまったことなどが短所として挙げられる。観察時にどちらかの被験児が全く「しゃべる」ことや「うたう」ことをしなかった回もあった。

被験児たちは、まず第1・2回目の観察時(生後10ヵ月)の時点で、母親の質問に対して声を出していることがわかる。またそれを助けているのが被験児たちの母親の子どもに対する積極的なかわりの姿勢である。第2回目のとき、ポーロの入っている袋を振った被験児に対して母親が「まだあるね」と語りかけることにより、被験児は喜んでまた振る動作を繰り返している。またポーロが転がって行ってしまったとき、被験児が発した「ア」という発語に対し、母親が「あっち行っちゃった」というニュアンスを汲み取り、「取ってきたら？」という働きかけをすることにより、「ア」ということばによってコミュニケーションをとることができた経験が、新たなことばを発する動機となっていくものと思われる。母親が被験児たちに語りかけるときの声のトーンは全体的に高く、抑揚の幅も大きかった。これは志村が述べているマザリーズの特徴と合致している⁶⁾。

被験児たちは、第10回の観察時の頃からくるくる回るのが大好きで、所謂めまいの感覚を楽しんでいるが、母親はそれに対して「くーるくるっ」とメロディーとリズムをつけて応えている(譜例1参照)。筆者も被験児たちの動作を擬音化して、例えば水を入れる真似をしたとき(第8回観察時)「チャチャー」などと言っているが、この母親もオノマトペをよく使用している。被験者児たちは自分たちが起こした行動に、オノマトペで大人たちが反応してくれることに対してとても嬉しい表情を見せた。



譜例 1

被験児たちは双子であるが、「しゃべる」ことに関し

ては次のような傾向がみられた。被験児Aはしゃべることばの数も多く、すでに生後11ヵ月の時点で本などから母親がピックアップしたことばをすぐ真似していた。一方被験児Bは意味のわからないことば(「ギーギギ」「ガーガー」など)をたくさん発しているが、生後19ヵ月観察時以降は明確なことばの数が増えている。

次に「うたう」ということに関してまとめてみたい。ここで「歌」と言っているものは先にも述べたように「既成の歌」を指している。歌に関しては生後12ヵ月の頃から《手をたたきましょう》の「あっはっは」の部分を被験児Aが真似して声を出している。一方被験児Bは歌に対して身体でリズムをとったり、足踏みをしたりという身体的な反応が多い。第6回目の観察時には被験児たちの姉が在宅していたこともあり、身体を動かしたり声を出す機会が増えていた。母親からの働きかけ以上に、姉が楽しそうにうたう姿に反応し被験児がうたう姿が観察されたことは、音楽教育の場に身を置いている者として示唆に富む経験だった。その後第9回の観察時(このときも姉が在宅している)には、被験児Aは姉が次々とうたう新しい歌にすぐ反応し、印象に残ったオノマトペの部分を真似していたが、被験児Bは自分が好きな《キラキラ星》をうたい続けるという現象がみられた。このときの被験児B(生後16ヵ月)はあまり「しゃべる」ことはできていないにもかかわらず、「うたう」ことには積極的であった。

今回の観察では、月齢があがるほど被験児たちがうたうことができる歌の曲数が増えていくというより、各被験児それぞれに好きな歌があり、そのうたうことのできる部分が増えていく傾向がみられた。それが被験児Aにおいては《とんとんとんひげじいさん》のアンパンマンバージョンであり、被験児Bにおいては《キラキラ星》であった。被験児が歌を覚えていく過程としては、自分の琴線に引っかかった部分をまず真似していき、それはオノマトペの部分や語尾であることが多かった。

被験児Aは第11回目の観察時には「トントン」「○○マン」「ワン」など部分的にうたっていたが、第15回目にはほぼすべての部分を動作付きでうたうことができた。それに加えて「カレーパンマン」のところでは声に抑揚がついていた。また被験児Bにおいては第9回目の観察時には《キラキラ星》の「キライラ(キラキラの部分)」「……(ひかるの部分)」をうたっていたが、第10回目には「まばたき」「キラキラひかる」「おそら……よ」の部分もうたえるようになっており、2

歳になる直前の第15回目の観察時には、ほとんどすべての部分をひとりであうことができた。その声は柔らかく、また筆者が初めにうたい出した音程（ドソソ）に沿ってラソソ……と正確な音程であうたわれた。

被験児Aと被験児Bがひとつの歌をほぼ完全にうたえるようになったのは生後23ヵ月の時点であった。被験児Aの方がすべての新しい歌に対して反応を示すものの途中で飽きることが多く、第14回目以降、被験児Aは母親が新しい歌をうたおうとすると部分的に怒鳴って声を出すようになった。一方被験児Bは身体を使って音楽に反応することが多かったが、好きな歌が固定されていて、23ヵ月の時点でうたわれた《キラキラ星》の歌の完成度も高かった。被験児たちの母親は子どもの歌をよく知っており、日頃から「うたうたうたうか?」と子どもたちに対していろいろな歌を披露し「うたう」方向へ誘っているが、被験児たちは新しい歌への誘導より、それぞれのお気に入りの歌をうたうことを好む傾向にあった。1歳児にとっては新しい歌をいろいろと教えられるよりは、ひとつの歌を繰り返すうたう方が良いことが示唆された。

V ま と め

今回の観察において、被験児たちの母親は非常に多く子どもたちに語りかけ、うたいかけ、身体的な接触をもっており、そのことにより被験児たちも音声を用いて母親に自分たちの意図を伝えようとしている姿を見ることができた。しかしながら被験児A・Bは母親からほぼ同じ働きかけを受けているものの、ふたりの「しゃべる」「うたう」には違いが観察された。被験児Aは他者からの働きかけに対しての反応が早くことばの習得数も多く、自分が興味のあるものに対しての働きかけも積極的であった。一方被験児Bは、ことばというより身体で気持ちを表すことが多く、特にお気に入りの音楽に対しては積極的かつ継続的な興味を示した。母親もそのことを感じており「被験児Aの方が『しゃべる』ことに関しては積極的であり、被験児Bは『うたう』ことが得意」と述べている。

次に被験児たちの母親についてであるが「本当にじょうずに子どもたちと遊んでいるのね」と筆者が伝えたところ、母親は「先生が来ているときはそのような時間がとれるけれども、いつもは『おかあさん忙しいから』とあまりかかわらない」と語った。母親が積極的に子どもにかかわることが大切と理解していて

も、なかなか時間的・精神的ゆとりがもてない状態にあることが、この母親のことばから推察された。今回は筆者という第三者が存在したことにより、この母親はより多く子どもと接する時間をもつことができたとも言えよう。しかしながら、ことばがしゃべれないうちから話しかけてくれ、自分の発した音声や自分の行動に対して反応を示してくれる人が近くに存在していることは、子どもにとってのぞましい環境であることに間違いはない。世の中の母親が気持ちにゆとりを持って子どもに向き合うことができる環境を整えていく必要もあるだろう。

音楽教育の観点からの研究課題をあげると、ひとつは「しゃべっているとき」と「うたっているとき」に音声の種類に違いがみられるのかどうかを音声分析することである。また南は「乳児期を脱した段階では、子どもは既に発話と歌のカテゴリーを互いに独立した関係として知覚し、行動しているはずだ⁹⁾と述べている。筆者も今回の観察を通じて「子どもの中で『しゃべる』『うたう』の違いがわかっているのではないか」と感じた場面があった。被験児Aは、第10回目の観察時に「うたう」という行動に対して高い声を出し、第14回・15回目では怒鳴り声を出している。その声はどちらも「しゃべる」ときには用いていない声であった。子ども自身が「しゃべる」と「うたう」の違いについてどのように感じているのかについても研究を進める予定である。

謝 辞

本研究において、15回にわたり快く調査にご協力くださったお母様、そしてふたりのお嬢様に深く感謝致します。

注

- (1) 「ころころたまごは おりこうさん ころころしてたらひよこになっちゃった」作者不詳
- (2) 「とんとんとんとん ひげじいさん とんとんとんとん こぶじいさん とんとんとんとん てんぐさん とんとんとん めがねさん とんとんとんとん 手は上に きらつきらつきらつきらっ 手はおひざ」作詞不詳 玉山英光作曲
- (3) 「とんとんとんとん アンパンマン とんとんとんとん 食パンマン とんとんとんとん カレーパンマン とんとんとんとん バイキンマン とんとんとんとん ドキンちゃん きらつきらつきらつきらっ ぼくチーズ(ワン)」
- (4) ピコ太郎が踊りながらうたう Pen-Pineapple-Apple

-Pen のこと

- (5) 「一匹の野ねずみが あなぐらにあつまって チュ
チュッチュチュッチュ チュチュチュチュッチュ おお
さわぎ」作詞不詳 外国曲
- (6) 志村はマザリーズの音声特徴として以下の5点を挙げ
ている。
 - ・発語の声全体が高い ・抑揚が大きい
 - ・ゆっくり話す ・相手の反応を待つように間をとる
 - ・同じ言葉を繰り返す

引用文献

- 1) 戸田須恵子 (2005) 乳児の言語獲得と発達に関する研
究, 北海道教育大学釧路港研究紀要, pp.101-108
- 2) 前掲
- 3) 石川眞佐江 (2013) 幼児の遊び場面における歌の諸相と
機能, p. 6, 東京藝術大学博士論文
- 4) 志村洋子 (2005) 乳児の音声における非言語情報に関す
る実験的研究, p.117, 風間書房, 東京
- 5) 南曜子 (1999) 言語習得期における発話と歌の関係, 音
楽教育学29(1), pp.17-32

参考文献

岡ノ谷一夫 (2010) 『言葉はなぜ生まれたのか』文藝春秋

- 大畑祥子 (2014) 『子どもの育ちと音楽』一粒書房
- 坂井康子・岡林典子・山根直人・志村洋子 (2011) 『喃語の
リズム変化』甲南女子大学研究紀要 人間科学編, 48号,
p.43-52
- 坂井康子・岡林典子・山根直人・志村洋子 (2012) 『乳幼児
の音声表現のリズムと抑揚』甲南女子大学研究紀要 人間
科学編, 49号, p.41-48
- 志村洋子 (1996) 『乳児音声におけることばと音楽』音楽教
育学26(1)
- 志村洋子 (2013) 『マザリーズが赤ちゃんに伝えるもの』On
-Ken scope 1 ヤマハ音楽研究所, インターネット,
http://www.yamaha-mf.or.jp/onkenscope/shimurayouko1_chapter1/2016/10/10 にアクセス
- 正高信男 (1993) 『0歳児がことばを獲得する時』中公新書
- 正高信男・辻幸夫 (2011) 『ヒトはいかにしてことばを獲得
したか』大修館書店

(平成29年9月6日受付)
(平成29年12月13日受理)